

鑑賞活動への意識を高めることで育つ「教師の目」

帝京大学 教育学部 初等教育学科 講師 大櫃 重剛

おおびつ しげたか



「教科指導法(図画工作)」鑑賞ワークショップ「仏像になってみよう」(約60分間)

1. 鑑賞学習に対する学生の苦手意識を克服するには

「これまで受けてきた鑑賞の授業では、どのような学習をしてきましたか？また、今どのようなイメージを抱いていますか？」と、現在勤務している大学の学生たちに問いかけると、「作品を見て、先生の

話を聞いて、感想を書くという流れが決まっていた退屈だった」「友達の作品を見て感想を伝える活動が多かったが、何を見ればよいのか正直よく分からなかった」「作家作品を模写することが多く、活動の幅の狭さを感じていた」等の各々が経験してきたエピソードを語ってくれた。また、これから教育実習へ向かう学生からは「自分が苦手だと感じていた時間なのに、その楽しさや意義をどのように子どもたちに伝えていけばよいのか」という不安の声も聞こえてきた。

もちろん、彼らを指導してくださった小学校や中学校美術の先生方が、造形表現や美術文化の広がりや伝えたり、美術を見る眼を培ったりするために様々な教材から精選し、指導方法を工夫されてきたことは間違いない。では、彼らの「鑑賞学習」観に未だ十分に根付いていないものは何なのか。それは、「能動的な学びの姿勢」と「より深く探究しようとする当事者意識」であろう。そのためには、先ず彼ら自身が「鑑賞学習が心から楽しめるものであり、学ぶ価値がある」ことを実感する必要がある。

新しく公示された学習指導要領においても、鑑賞の活動を通して自分の見方や感じ方を広げ、深めていくことで育成する「思考力、判断力、表現力等」の重要性（小学校）、「B 鑑賞」イの（イ）の指導に当たっては、日本の美術の概括的な変遷などを捉えることを通して、各時代における作品の特質、人々の感じ方や考え方、願いなどを感じ取ることができるように配慮すること（中学校 3 内容の取扱い）が示されている。本稿では、図画工作科と美術科の連携も視野に入れつつ、学生たちの「鑑賞学習」観を刺激しようと提案した授業を通して見えてきた、学生たちの意識の変容やその解釈について述べたい。

2. 先行実践研究を通して

今回の提案授業を考案するきっかけになったのは、私自身が体験した新しい「鑑賞学習」との出会いである。

それは、2017年8月「図工美術会議」¹⁾により主催された「図工・美術 夏期ワークショップ」（会場：琉球大学教育学部附属小学校）において、照屋真紀子 教諭（現・那覇市立神原中学校）が提案された『なりきり仏像コンテスト』である。参加した私は、それまで自分が実践を重ねてきた鑑賞学習について概念を変えることになった。本ワークショップの受講対象は主に沖縄県内の小中学校の先生方が大半であり、「沖縄県にとってあまり馴染みのない仏像を鑑賞対象に設定し、仏像になりきる活動を通して、表情や形よさや面白さを発見し、日本の美術文化について考えを深める」ことをねらいとして実施された。

主材料は新聞紙とマスキングテープのみで、あとは初めて目にする仏像の画像が手渡された。県外からの受講者は少なかったが、沖縄県内の先生方と手にした仏像の画像を隅々まで観察しながら「どうやって新聞紙を操作すれば、この造形を再現できるか」と繰り返し相談する時間は、大変豊かな学びの場と

なった。

しかも、この研修で私は幸運にも仏像に変身するモデル役に抜擢され、自分の体型に合わせて髷を再現してもらった衣を纏ったり、見たことがない仏具を持つ手首の角度や体全体の傾きも似せようと微調整をしたりする貴重な経験をする事ができた。とくに「仏像に変身する活動自体が、子どもたちの能動的な鑑賞の姿勢を促す環境になっている」授業設計に、今後の鑑賞学習のあり方について可能性を見出す事ができたことは大きな学びとなった。この経験をきっかけに自分の「鑑賞学習」観を見直し、東京へ戻ってから教材研究を進めるようになり、図画工作科専科として小学校低学年から高学年までの様々な発達段階で実践を重ねていったのである。



3. 教員を目指す学生たちと取り組む鑑賞ワークショップ

今年度から本学で「教科指導法(図画工作)」を担当するようになり、主に学部2年の教職を志す学生たちと Semester 内で鑑賞学習についての演習を行う機会を得た。

昨年度まで各学年で実践してきた事例を前半の講義で紹介し、いよいよ鑑賞ワークショップ「仏像になってみよう」(約60分間)に取り組むことになった。そもそも本活動の対象は中学生であったが、実際に小学校高学年の児童と何度も実践してきた手応えから「これから小学校教員を目指す学生たちに、あの時の感動を味わわせたい。きっと彼らの鑑賞学習に対する概念を刺激するはずだ」と自分なりに活動環境をアレンジして演習に取り入れることとした。

- ・4名1グループで活動し、その内の1名を仏像モデル役として選出する。30名規模の授業で8班。
- ・材料は、ハترون紙(900×1200mm、片面に光沢があり作品等の梱包に用いる薄い紙)各班10枚。
- ・用具は、はさみ、粘着テープ。活動場所は、各班の作業机(必要に応じて箱椅子も使用可)。
- ・各班の代表者(モデル役)が抽選の袋から、仏像の画像をラミネート加工したカード(A4)をひき、

取り組むテーマ・モチーフが決定する。本時において準備したカードは、以下の通り。

○『八部衆立像 阿修羅』	国宝 奈良・興福寺	2枚
○『不動明王三尊像』	国宝 運慶作 静岡・願成就院	2枚
○『菩薩半跏像 (伝如意輪観世音菩薩)』	国宝 奈良・中宮寺	2枚
○『執金剛神立像』	国宝 奈良・東大寺 法華堂 (三月堂)	2枚
○『帝釈天半跏像』	国宝 京都・東寺 (講堂)	2枚

(1) 仏像の画像を観察し、材料の特徴を知る。

まず学生たちは「この仏像見たことある」「初めて会った仏像だ。この手に持っている物は何だろう」など、画像から受ける第一印象について話し合いながら、細部までじっくりと観察していた。また、実際に手に取ったハトロン紙の軽さ、質感、透け具合などを感じ取り、これから再現していく仏像の各部位の特徴と照らし合わ



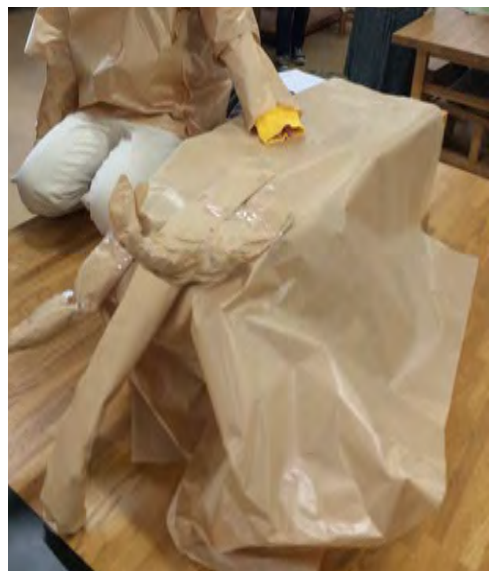
せながら操作方法を探っていく。

「阿修羅の腕は意外と細いね。この紙は軽いけど、丸めて棒にすると結構丈夫になるから再現できそう。でも関節はどうしよう?」「不動明王の衣はプリーツスカートのようにになっている。蛇腹折りにして腰に巻いたら?」と、仏像の画像を覗き込みながら彼らの手はずっと動き続けている。しかも、「単に体に巻きつけるより、一度シワシワにから広げ直してつけてみたら、もっと雰囲気が出ると思う」と、仏像モデル役を含めた4名の間で活発な意見交換が交わされていた。

(2) 周囲の環境も表現に取り込む。

さらに、図工室という活動環境にあるものを活用して、自分たちの表現に取り入れる姿も見られた。例えば、菩薩半跏像の背後にある「光背」を天井からぶら下がっている延長コードに貼り付けることで高さを調整したり、仏像が座る「台座」や跨る「象」を図工室の箱椅子を転用したりして、実際にモデル役がポーズをとりやすい環境を整えていた。さらに、驚かされた工夫としては、「阿修羅像の6本の腕をどのように再現するか」という課題に対して各班から出されたアイデアが大きく異なっていた点である。「モデル役(自分)の腕で再現するには、胸の前で合掌している腕ならば、長時間でも我慢できる」「高く上げた腕はどうしても重さで下がってきてしまう。そうだ!天井に直に貼り付けてみよう」など、学生たちの臨機応変な発想が次々と見られた場面があった。

環境を巧みに取り込むという視点では、鑑賞だけでなく造形遊びの要素も多分に含まれた活動であることもわかった。



(3) 向かい合う仏像同士で互いの視点について学ぶ。

今回の仏像カードは、あえて同じ仏像につき2枚ずつ抽選の袋に準備していた。それは、同じカードを引いた班同士での学び合いを促すためである。広い図工室ではあるが、偶然にも隣り合う班で同じ仏像を制作する過程が見られるという現象が起きていた。自分たちの仏像をなるべく似せて再現することに没頭しつつ、「どうやら隣の班も同じ仏像を目指しているようだ。負けられない！」と自然に競争意識を抱き、互いの工夫を垣間見たり感想を伝え合ったりしている光景が、あちらこちらで見られた。また、モデル役の学生もただじっと我慢して鎮座しているだけでなく、携帯電話のカメラ機能を使って周囲のモデルが仏像に変身していくプロセスを定点撮影する試みを自分たちで始めていた。



(4) 制作を進める中で仏像についての興味や愛着をもつ。

抽選の袋から引いて初めて出会った仏像について、じっくり観察し、ハトロン紙を使って再現するうちに、学生たちは「ところで不動明王が持っている物は何だろう?」「背後にあるもの(光背)や衣に彫り込まれている紋様には、どのような意味があるのか」「あれ?もしかしたら修学旅行の時に見ていたのかもしれない」と、自分たちが再現しようとしている部位や対象そのものについて疑問や関心を抱くようになる。もちろん活動の導入場面において「光背・台座・宝冠・瓔珞・天衣・裙・螺髪・化仏・怒髪・持物・武器」などの仏像にまつわる基礎知識を教えるから制作に向かわせることも考えられるが、今回は先ず視覚的に情報を集めハトロン紙という材料の特徴と照らし合わせる活動を主軸とした。モデル役を長時間任されていた学生が「この足の組み方、手首の角度は本当に辛い。でも検索してみたら“印相”とって意味があることが分かり、愛着をもって頑張るこ



とができた」と、班のメンバーに語っていた。

(5) すべての作品を見比べながら感想を発表し合う。

活動も終盤になった頃、移動できるモデル役に集合してもらい、それぞれの班が再現した仏像を一堂に会した鑑賞会を行った。「同じ仏像を目指していたはずなのに、それぞれの部分で表現方法が違って興味深い」

「60分間では時間が足りないくらい没頭できる活動だった」「今回は5体の仏像だけだったが、他の仏像にも興味が出てきたので近くでも拝観できるかどうか調べたいと思う」などの感想が交流された。



4. おわりに ～本演習を通して変容してきた学生の意識について

鑑賞ワークショップ「仏像になってみよう」を通して、学生たちの鑑賞学習に対してどのように考えるようになったか、について授業後のリアクションペーパーから考えていきたい。(部分を抜粋)

- 「見たことや感じたことを自分自身の表現活動につなげていく」ということを学び、鑑賞の捉え方が変わりました。見たことを基にして自分も表してみることで、子どもの感受性も豊かになり、さらに鑑賞でも新たな発見につながっていくと思います。
- 今回の演習では、鑑賞とはいえまず活動を進めてから他の班の作品(モデル)を鑑賞したことにより、互いにこだわって再現した部分について熱心に伝え合うことができました。したがって、「鑑賞で何を見たらよいか」という不安はなく、互いの違いに視点を絞って感じ合うことができた。このような感覚が図画工作科の鑑賞場面では大切だと感じている。
- 今回の演習では同じ仏像を目指すグループが教室内にいたことで、自分たちと似た表現をしている様子を見てライバル心を燃やしたり、反対に思いもつかないような椅子の使い方を目にして感心したりして大いに刺激になった。「仏像」という、自分たちと近すぎず遠すぎないテーマ設定であったからこそ、

「仏像になる」期待感が意欲につながっていったのではないか、と思う。

●菩薩半跏像のモデル役を担当した私は「この仏像はおそらく世の中の平安について考えているだろうから、どのような表情をすともっと近づけるかshれない」「なぜ、このように苦しいポーズにしたのか」など、作品を見るだけでは思い付かないようなことについて考えていた。小学生に鑑賞の授業をするならば、普段見えない部分に気付かせることができるように「見る活動×表す活動」という様々な活動の組み合わせについても考えてみたい。

●今回のような活動では、とくに制作している途中段階を撮影した記録画像が振り返り資料として重要だと感じた。しかし、自分たちの班もそうだったように活動に熱中しすぎたばかりに撮影することを忘れてしまっていた。この失敗からも、授業者が制作後に鑑賞する時間を十分に確保したり、モデル役が撮影担当になるように声かけしたりするなどの工夫をしていきたいと考えている。

以上、これらの抜粋した文章を書いた学生は、明らかに普段の演習よりも「教師としての当事者意識」を感じながら学修内容を振り返っていた。その理由は、本演習を通して「鑑賞学習が心から楽しめるものであり、学ぶ価値がある」ことを実感した先に、その感動をより良い形で子どもたちへ伝えていきたい、という「教師の目」が萌芽したからに他ならない。今回の実践に至るきっかけを与えてくださった照屋先生に感謝しつつ、学生たちの意欲を高めていく授業研究について今後も取り組んでいきたい。

参考文献)

照屋 真紀子(那覇市立神原中学校 教諭)「美術文化に対する見方や感じ方を深める鑑賞の活動 ～表現の活動との関連と対話による授業構成の工夫～」那覇市立教育研究所

注1) 図工美術会議(図美会): 2007年に発足した沖縄の図画工作・美術の授業研究会。授業を中心とした理論研究や情報交換などを行いながら、毎年2月に公開授業研究会、8月にワークショップを開催。会員は、小学校を中心に中学校、高等学校、特別支援学校と幅広く、多角的な視点で図工・美術の授業について考える会。